

日本常民文化研究所展示室 収蔵資料展示「旅のおみやげ」

期間：2019年3月14日（木）～9月30日（月）

会場：神奈川大学横浜キャンパス3号館 神奈川大学日本常民文化研究所展示室

郷土玩具から読み解くこと

加藤 友子

日本各地では江戸後期から明治時代にかけて土地の風物、習慣、信仰に結びつけられた玩具が作られていた。これらは正月・盆の節日や社寺の縁日に売られ、また湯治場のおみやげものなどにされた玩具も多い。今回の展示で紹介した張子人形・土人形・木彫のものなど多様であり、明治・大正期に「土俗玩具」「地方玩具」「諸国玩具」などとよばれ、昭和10（1935）年頃より「郷土玩具」の名称が広く使われるようになった。

明治13（1880）年、東京の玩具研究家 清水晴風は、玩具愛好者らと「竹馬会」という会を作り、明治24（1891）年から玩具を描いた画集『うなゐのとも』を刊行しはじめている。この集まりは、彫刻家から学者までさまざまな人がおり、人類学者の坪井正五郎の顔も見られる。こうした玩具収集の背景には、明治期に欧米心酔主義に反発していた人々が、古来の玩具に郷愁をもとめたことがあり、単なる趣味を越えた愛好運動をも台頭させている。

一方、大正期に渋沢敬三を中心とするアチック・ミュージアムでは、玩具製作の技術伝搬を通して文化の伝搬移動の原理を追究するために玩具の収集をはじめている。ここでは期待する研究成果

は得られなかったが、神奈川大学日本常民文化研究所の前身であるアチック・ミュージアムの研究対象の出発点となる玩具研究は、明治期における祖国の郷愁をもとめる思想とは別の目的であったことは注視するにあたいするだろう。

こうしたことから本研究所では、昭和初期製作の玩具を150点ほど収集し「旅のおみやげ」展として公開をした。展示するにあたり玩具そのものだけでなく、玩具が収納された箱や解説書も一緒に展示することを心がけた。信仰や郷土の風土が記録された解説書は、昭和初期の歴史を読み解くヒントが隠されている。

現在では多様な玩具が普及し、こうした郷土玩具の生産は衰え、むしろ趣味的な鑑賞用玩具として愛好されているが、郷土趣味にはとどまらない「郷土玩具」研究を示していきたい。

【参考文献】

和歌山県立紀伊風土記の丘編 2007『紀州郷土玩具事典』
（平成19年度秋期特別展「祈りの民具と郷土玩具」解説書）



写真1 展示風景



写真2 木葉猿と解説書